

[研究ノート]

ヘミングウェイの「異国にて」における
共産主義者と愛国的カフェ・ガール

光 富 省 吾*

序

ポール・スミスによると、1926年8月アーネスト・ヘミングウェイは当時の妻ハドリーとの別居生活に入るためにリビエラからパリに戻ってきた。その時の短い旅の体験をフィクション化した「贈り物のカナリア (A Canary for One)」を『スクリブナーズ・マガジン (Scribner's Magazine)』に送った後、同年11月22日「異国にて (In Another Country)」を同誌宛に送っている (Paul Smith 159)。その結果2つの作品は『スクリブナーズ・マガジン』1927年4月号に同時掲載されている。さらに1927年10月に出版された『男だけの世界 (Men Without Women)』にも両作品は収録される。長い間戦争のトラウマに苦しんだヘミングウェイが「異国にて」を書いたのは、『日はまた昇る (The Sun Also Rises)』の成功によって、作家として自信を持ち、ミラノ体験を物語化する心理的余裕ができたからであると考えられる。

従来、「異国にて」の研究は、語り手の戦争体験による膝の負傷及び語り手

* 福岡大学人文学部教授

と同じようにリハビリを続けるイタリア人少佐の戦傷と妻の死という二重の苦しみに集中して来た。さらに「異国にて」は、作家のイタリアの負傷体験に基づいているため、「身を横たえて (Now I Lay Me)」及び「ひとりだけの道 (A Way You'll Never Be)」と比較されることが多い。他の2つの作品はニック・アダムズが主人公であるが、「異国にて」の語り手の名は明かされていない。しかし、フィリップ・ヤングはこの語り手をニック・アダムズと解釈しているようで、「異国にて」を『ニック・アダムズ・ストーリーズ (Nick Adams Stories)』に収録している。ヤングの他にアール・ロヴィット、アーサー・ウォルドホーン、ジョゼフ・フローラのような研究者もヤングと同じような解釈をしている (Young 58-59, Rovit 96-97, Waldhorn 68-70, Flora 135)。一方ジョゼフ・デファルコ、ジュリアン・スミス、ジェイムズ・スタインからは、この作品の語り手が必ずしもニックと同一人物であると考えていない (DeFalco 135, Julian Smith 137, Steinke 33)。¹ またこの短編小説のタイトルがクリストファー・マーローの戯曲『マルタ島のユダヤ人 (The Jew of Malta)』やT. S. エリオットの詩「ある婦人の肖像 (Portrait of a Lady)」と関連するために、そのインターテクスチュアリティも研究の対象とされて来た (Young 59, Julian Smith 137-138)。

アメリカ人兵士の戦傷による苦悩とイタリア人少佐の否定的結婚観や人生のはかなさが、この短編小説のテーマであるとされて来たこれまでの研究を否定しようというつもりはない。実際このようなテーマが短編全体を支配していることは否定しようがないのである。しかしここでは、これまでこの研究においては、これまで指摘されることがなかった一面を明らかにしたい。言い換えれば、この研究の目的は、個人の自由が侵害されることを嫌い、アメリカの民主主義を何よりも尊重するヘミングウェイが、戦傷に苦しむ語り手と妻の死に耐える少佐の生き方を基調とするこの短編小説に、反戦的な共産主義者居住地区と愛国主義的なカフェという対照的な場面を挿入することによって、ヘミング

ウェイがムッソリーニ批判を忍ばせていることを明らかにすることである。

I 作品の構成

この短編小説を語り手の戦傷とそれに伴う苦悩を描いた前半と少佐の結婚観が中心となる後半とに二分することができる。ポイントとなる断片的なエピソードを順に列挙してみる。

(A)前半

1. "In the fall the war was always there, but we did not go to it any more." (33) というセンテンスで始まり、戦争に一步距離を置く語り手たちの立場と心境が提示される。後に "We only knew then that there was always the war, but that we were not going to it anymore" (35) と繰り返すことによって、この気持ちは強調される。
2. 狐、鹿、小鳥（の死体）が店の前にぶらさがっていたミラノの商店街の様子 (33) は、語り手達が目の当たりにしてきた戦場の死体を連想させるのに十分である。これは、後に出て来る死の恐怖ともつながる。
3. 語り手達は入院している病院から毎日治療のため別の病院へ通う。ヘミングウェイの体験にあわせるなら、語り手が入院している病院はミラノのアメリカ赤十字病院（Ospedale Croce Rossa Americana）であり、リハビリに向かう病院はオスペダレ・マジョーレ（Ospedale Maggiore）である。治療効果がまだ実証されてもいない器械による治療を受けながら、回復の希望も持てないまま毎日同じことを繰り返す、出口の見えないトンネルにいるような心境を描き出している。
4. 同年代の負傷した兵士仲間とは別に、かつてのイタリアでナンバー・ワンのフェンシングの達人であり、手を負傷した少佐が登場する。語り手と同じような器械治療を受けて、回復の見込みも見えないが、医者には "And will I too

play football, captain-doctor?"(*Men Without Women* 34) と尋ねる。もちろん、必ず元どおりになるという医者を決まりきった返事を信じているわけではない。医者に "You have confidence?" (*Men Without Women* 34) と尋ねられても、"No" (*Men Without Women* 34) と答える、どこかシニカルな少佐の態度が語り手の関心を引いている。

5. 3人のイタリア人兵士といっしょに治療に向かう語り手は、病院へ向かう途中、近道をするために通過する共産主義者地区で、厭戦的気分でありながら、軍服を着ているために、反戦的な共産主義者に批判的なまなざしを向けられる。

6. 黒いシルクのハンカチで顔を覆った若者は整形手術を受ける予定だったが、手術後も元には戻らなかった。前線に出たその日に負傷し、戦場での「勇気」の価値が確定しなかったため、後に語り手と気持ちを通じあえる数少ない友人となる。

7. イタリアで最も愛国心の強い人はミラノ座の隣のコーヴァのカフェ・ガールだったと語り手は伝える。さらに "I believe they are still patriotic" (*Men Without Women* 35) と付け加えている。

8. イタリア語で「友愛」を意味する "*fratellanza*"(36) とか「犠牲的精神」を意味する "*abnegazione*" といった形容詞を取り除くと、語り手がただ単にアメリカ人であるという理由だけで、勲章をもらったことがわかり、イタリア人の友人達との間に距離ができる。その後語り手は死の恐怖を吐露する。このエピソードは語り手の戦傷はいわゆる名誉ある、勇敢な行為によるものではなく、他の3人とは勲章の重みが異なることを示しているが、後の少佐の苦悩に比べると、この3人の戦傷もそれほどの価値がないことが最後にかかる。

9. 語り手は戦傷と勇気について考えを巡らしながら、最後に死の恐怖を吐露する。

10. 語り手が勲章を得た理由を知った三人の兵士と距離ができたのに対し、前線に出たその日に負傷した若者も三人の仲間になれなかったという話を通じて、

戦場における勇気の意味について考える。

(B)後半

11. 「勇気」(*Men Without Women* 36) の価値を信じない少佐は、語り手のイタリア語の文法的間違いを修正しながら、上手さを誉める。しかし、語り手が少し思い上がった態度をとると、突然厳しくなり、文法的に正しく話すように強制する。外国で暮らす上で大きな障害は様々な社会制度、習慣、宗教と並んで言語の違いが挙げられ、「異国にて」というタイトルと最も関係のあるエピソードである。

12. 少佐は語り手に将来の展望を尋ね、語り手はアメリカへ戻って、結婚すると答えると "A man must not marry" (*Men Without Women* 37) と激しく叱責される。後に妻が肺炎で亡くなったせいで、そのような態度をとったことがわかり、語り手は人生のはかなさと少佐の苦悩を知る。

13. 完治した手の写真が飾られているが、その器械を使用するのは自分たちが最初であると信じている語り手たちにはあまり効果がない。

前半は戦傷の苦悩、後半は結婚に関する否定的見解が中心となっている。このように後半は少佐が中心となるため、スタインカが述べるように、「異国にて」は少佐の物語であると考えられることもできる (Steinke 34) が、ニック・アダムズ物語に代表されるイニシエーション・ストーリーと考えれば、語り手よりも深い少佐の苦悩を知ることによって、語り手が人生の真実に目覚めていく物語と解釈することもできる。

II テーマ

この短編小説を構成する主要なテーマは、次のようにまとめることができる。

(A)語り手はニック・アダムズか？

前に述べたように、この作品の語り手がニックであるのかがよく議論されるのであるが、「異国にて」、「身を横たえて」及び「ひとりだけの道」という3作品は、ヘミングウェイのイタリア体験を強く反映しているために、共通点として、戦傷によって引き起こされた苦悩が挙げられる。しかし、「異国にて」の主人公には、スタインカが指摘するように、他の作品のニックが抱えている深刻なトラウマが見られないという大きな違いがあることも事実である(Steinke 34)。「異国にて」の語り手は膝の負傷による苦しみを抱えているし、死の恐怖を正直に告白している。しかし、この短編小説では、それによって不眠症になり、精神のバランスを失うという「病気」は描き出されてはいない。少なくとも、戦争で受けた傷が脳神経にまでは及んでいないのである。他の作品に登場するニック・アダムズと共通点は見られるが、もし相違点を重視すれば、語り手はニックではないと考えるのが妥当である。

(B)『武器よさらば』との共通点

形容詞を取り除くと、アメリカ人であるという理由だけで、勲章をもらったと語り手は語る。ここで勲章によって表される「名誉」の実体が明らかになる。つまり、一般に「名誉」と呼ばれるものが、実は空虚なものであることだ。『武器よさらば』で "I did not say anything. I was always embarrassed by the words sacred, glorious, and sacrifice and the expression in vain" (*A Farewell to Arms* 184) という認識に達したフレデリック・ヘンリーに通じるものがある。戦死や戦傷に「栄光、神聖、犠牲」などの価値を付加して、美化するのは、国家権力の常套手段である。さらに、形容詞の除去は、形容詞の使用を極力控えるヘミングウェイの文体にも通じる。

(C)死と接した人間の深い生き様

少佐の妻は肺炎で死んでしまう。これは何の前触れもなく突然襲ってくる不条理な死である。しかし、語り手は少佐を通して、死を意識した人間の深い生き様を知る。同じように負傷したが、語り手が受けた勲章の真の意味を知って、語り手から距離を置くようになった兵士たちの生き方より、少佐の生き方から、語り手は真の「勇気」を学ぶ。

以上挙げたことが、この短編小説の主要なテーマであると考えられるが、ここからはムッソリーニというこの短編小説の隠れたテーマについて述べて行きたい。

Ⅲ ムッソリーニのイタリア

ヘミングウェイがミラノの共産主義者と愛国主義者を併置した意味を考えるなら、当時のイタリアの政治的状況を踏まえた上で検討することも無意味ではない。ここからは、イタリアとムッソリーニの歴史をリドリーとスミスに基づいて、短くまとめてみる。

イタリアは長い間オーストリア＝ハンガリー帝国の支配下にあった。1861年に独立を果たし、国家として統一されるが、イタリアの近くにはイタリア人が多く暮らしながらも、まだイタリアに帰属できない地域がいくつかあった。19世紀末から20世紀初頭は、イタリア人の民族意識が目覚めていた頃で、そのような地域を取り戻そうという気運が高まっていた。そのような状況の中で、1909年ムッソリーニはアルプス南部の（オーストリアの一部の）トレンティーノ地方に赴任し、ここで未回収地回復運動に遭遇し、影響を受ける。トレンティーノ地方の中心的都市トレントで反オーストリア的の記事を書き、オーストリア政府からトレンティーノを追放処分となり、郷里フォルリに戻る。1910年社会党の（週刊の）機関紙『階級闘争（*La Lotta di Classe*）』編集長となる。『階級闘争』の発行部数を増やすことに成功したため、1912年、社会党の機関紙

『前進！(Avanti!)』の編集長に抜擢され、ミラノに向かう。ここでも発行部数を3万から一気に10万に増やすことに成功した。1914年サラエボでオーストリア皇太子夫妻が暗殺されたことを機に第1次世界大戦に入る。1914年10月これまで中立主義であったムッソリーニは突然参戦主義に転向し、『前進！』で自説を展開し、その結果『前進！』編集長を解任される(Denis Mack Smith 24, Ridley 66)。その後ミラノで『イタリア人民(*Il Popolo d'Italia*)』を創刊する(Denis Mack Smith 25, Ridley 69)。このあとイタリアは1915年5月オーストリア、8月オスマン-トルコ、1916年8月ドイツに宣戦布告した。1915年ミラノで参戦主義者だけで革命行動ファッシを設立し、党員はまもなく5000人になった。その後ムッソリーニは兵士として参戦するが、1917年2月負傷し、8月に帰国にしている。その後ミラノで『イタリア人民』の編集長に復帰している(Denis Mack Smith 28-29, Ridley 79)。ここで注目すべきは、1917年10月秋、カポレットの敗戦によって反戦運動が起きたことだ。さらに同年ロシアの3月と11月の2度に亘る革命によって、共産主義の動きがイタリア国内にも伝わって来て、体制に批判的な動きが生まれている。1918年10月ヴィットリオ・ヴェネットで勝利、11月オーストリアは降伏する。これによって戦争は終結する。その後1919年ムッソリーニは戦闘ファッシを結成した(Denis Mack Smith 35, Ridley 90-91)。戦闘ファッシは、ミラノでは、『前進！』本部を焼き討ちにするなど、社会党勢力を襲撃した。その後ムッソリーニは1922年ローマ進軍を実行し、同年10月ファシストによる政権を樹立することに成功した。1924年には社会党の国会議員マッテオッティはムッソリーニに抵抗したために暗殺され、1926年にはムッソリーニ政権は、アントニオ・グラムシと他の共産党員を逮捕して、政敵を次々と追放して、政権をより磐石なものにして行った。

イタリアの状況と並んで、ヘミングウェイ自身のイタリア滞在に関しては、次のようにまとめられる。ヘミングウェイは1918年4月カンザス・シティ・

スター社を退職し、5月ニューヨークを出て、6月パリ経由でミラノへ入り、7月8日フォッサルタで脚を負傷し、7月15日ミラノのアメリカ赤十字病院（Ospedale Croce Rossa Americana）へ入院し、11月休戦に入り1919年1月アメリカへ帰国している（Baker 38-56, Meyers 26-40, Nelson & Jones 8-11）。

作家の実体験とフィクションの中の出来事を無理に合わせる必要はないのだが、もしヘミングウェイの経歴と重ねるとすれば、この短篇は1918年の秋を背景としていと考えられる。たとえ重ねなくても、ミラノ市内にいる反戦的共産主義者のことを考慮すると、この短篇の時代的背景は1917年から1918年と考えられる。そしてイタリアの歴史では、この時期は古い体制が崩壊し、新しいファシズムの時代へ移行していた過渡期であることも深く認識する必要がある。その頃ムッソリーニはミラノで『イタリア人民』を編集し、愛国心を鼓舞していた。語り手は、反戦的な共産主義者と並んで、愛国心に燃えるカフェの女の子を次のように描写している。

The girls at the Cova were very patriotic, and I found that the most patriotic people in Italy were the café girls—and believe they are still patriotic. (*Men Without Women* 35)

問題となるのは、最後の "and believe they are still patriotic" である。この文の「現在」とはいつの時代を指しているのか？単純に考えれば、ヘミングウェイがこの短編小説を執筆した1926年9月から11月と考えられる。あるいはこの作品が雑誌に掲載された1927年4月、さらに、この短編を収録した『男だけの世界』が出版された1927年10月と考えるのが妥当であろう。執筆して短編集に収められるまでの約1年である。つまり語り手が「いまだに」愛国的であるといったのは1926年から1927年のイタリアを指している。前に述べたように、1922年にローマ進軍という一種のクーデターによって、ムッソリーニ

は政権を奪取し、その後独裁体制を整えることに成功した。この短編で言及される「現在」は、1926年から27年のイタリアであり、当時の『スクリプナーズ・マガジン』の読者には、そのような知識があることをヘミングウェイは当然想定していた。² 1927年ヘミングウェイはイタリアを旅し、その時の体験を「祖国は汝に何を訴えるか？(Che Ti Dice la Patria?)」に描き出している。この短編で、ヘミングウェイは、ムッソリーニが政敵を暴力によって政敵を追放し、権力の一極化をはかった政権下で国民のモラルは低下し、墮落した姿を伝えている。「異国にて」において、(会話部分を除いて)唯一現在形で語られる "and believe they are still patriotic" という部分は、「祖国は汝に何を訴えるか？」で描かれるイタリアをヘミングウェイは読者に想起させる。この2つの短編は創作・発表された時期は約半年のずれがあるが、短編集『男だけの世界』に両作品とも収録されている。そして、この短編集では、「異国にて」と「祖国は汝に何を訴えるか？」の間には「白い象のような山並み (Hills Like White Elephants)」と「殺し屋 (The Killers)」という2つの短編しか存在しない。このように「祖国は汝に何を訴えるか？」を読めば、「異国にて」で言及される愛国心の実態が自然に理解できるように工夫されているのである。大袈裟な言い方が許されるならば、表面的には似ていない2つの作品が、この一点によって、深い地下組織で結ばれていると言えるのである。

問題となるカフェ・コーヴァは第2次世界大戦によって焼失したために、現在は別の場所にあるが、ヘミングウェイのミラノ滞在時には、作品で語られるように、ミラノ座の隣に位置していたため (*Men Without Women* 34)、ミラノの文化人と上流階級の社交の場になっていた。「異国にて」に描き出される愛国的なコーヴァには、ムッソリーニが過激な右翼勢力だけでなく、上流階級と文化人をファシズムに取り込んでいくプロセスを見ることができる。実際にムッソリーニはダンヌンツィオらの文学者と未来派の芸術家たちを巧みにファシズムに取り込んで行くことに成功しているのだ。

結論

この短編小説は、決して政治的プロパガンダを目的としたものではない。しかし、テーマとは無関係に思われる共産主義者及びそれとコントラストをなすカフェ・コーヴァにいる愛国主義的な若い女性たちのエピソードを挿入し、未だに "patriotic" であると「現在（1926年から27年にかけての、出版当時のイタリア）」に言及することによって、新しいイタリアを作るという名目の元でファシズムへの道を邁進し、その結果道徳的に墮落したイタリアを暗に批判するというヘミングウェイの政治的立場が、この短編小説に見えて来るのである。

注

1. たとえばスタインカは、語り手とニックの苦悩を比較して、"By comparison with Nick in 'Now I Lay Me,' the psychological effects of his wound are not as severe"(Steinke 34) と述べている。
2. ヘミングウェイは、読者はイタリアの共産主義のその後を知っていることを想定しているのであるが、同じようなことを、ヘミングウェイはそれまでも『われらの時代に (*In Our Time*)』収録の「革命家 (The Revolutionist)」において行っている。この短編小説においては、かつてムッソリーニが編集していた『前進!』を挿入することによって、楽観的な共産主義革命を信じる、若いハンガリー人の革命家が、ムッソリーニ支配下のイタリアで弾圧されて行く姿を暗示的に描いている。

参考文献

Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: A Life Story*. New York: Charles

- Scribner's Sons, 1969.
- Flora, Joseph M. *Hemingway's Nick Adams*. Baton Rouge and London, Louisiana University Press, 1982.
- Hemingway, Ernest. *A Farewell to Arms*. New York: Charles Scribner's Sons, 1969.
- . *In Our Time*. New York: Charles Scribner's Sons, 1970.
- . *Men Without Women*. New York: Charles Scribner's Sons, 1970.
- . *The Nick Adams Stories*. New York: Charles Scribner's Song, 1972.
- . *The Sun Also Rises*. New York: Charles Scribner's Sons, 1970.
- Meyers, Jeffrey. *Hemingway: A Biography*. New York: Harper & Row, 1985.
- Nelson, Gerald B. & Jones, Glory. *Hemingway: Life and Works*. New York: Facts on File Publications, 1984.
- Ridley, Jasper. *Mussolini: A Biography*. New York: Cooper Square Press, 2000.
- Rovit, Earl. *Ernest Hemingway*. Boston: Twayne Publishers, 1963.
- Smith, Denis Mack. *Mussolini*. London: Phoenix Press, 2001.
- Smith, Julian. "Hemingway and the Thing Left Out." *The Short Stories of Ernest Hemingway: Critical Essays*. Ed. Benson, Jackson J. Durham: Duke University Press, 1975, 135-47.
- Smith, Paul. *A Reader's Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Boston: G. K. Hall & Co., 1989.
- Steinke, James. "Hemingway's 'In Another Country' and 'Now I Lay Me.'" *Hemingway Review* 5(1985), 32-39.
- Waldhorn, Arthur. *A Reader's Guide to Ernest Hemingway*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1972.

Young, Philip. *Ernest Hemingway: A Reconsideration*. University Park
and London: The Pennsylvania State University Press, 1966.

大森実 『人物現代史 2：ムッソリーニ：悲劇の総統』 講談社，1978.

ギショネ、ポール 『ムッソリーニ：ファシズム』長谷川公昭訳 白水社，
1995.

木村裕主 『ムッソリーニ：ファシズム序説』 清水書院，1996.